

【研究ノート】

「東山泉涌律寺図」について

京都東山の泉涌寺は、嘉禄2年(1226)に俊芿(1166~1227)が創建した寺です。入宋僧でもあり、日本の仏教の現状を憂いていた俊芿は、僧の生活基盤となる伽藍を正統の姿へ戻すべきと考えていました。造営に先だって俊芿が作った「泉涌寺勸縁疏」(1219年)では、「近頃相次いで日本で造られている伽藍は、まるで遊亭みたいだ。中国で自分が見てきたような、まっとうな伽藍を造ることこそ仏法の興隆につながる」と主張しています。

それに基づいて造営が開始されたわけですが、『泉涌寺史 本文篇』(法蔵館、1984年刊)などによれば(1)、嘉禄元年(1225)秋に「重閣講堂」の建立が開始され、翌年春には「花構落成」したと記録に残ります。その後も周辺に塔頭が建てられますが、そのなかで特筆されるのは、応安5年(1372)頃に、後光厳天皇を本願とし、竹岩聖皇を開山とする雲龍院が創建されたことです。以後、後円融天皇、後小松天皇も竹岩に帰依し、後円融天皇は龍華院を開創、雲龍・龍華の二院は一体化して泉涌寺の別院という高い寺格が定まります。

こうして俊芿の理想をもとに築かれた伽藍ですが、応仁文明の乱で焼失し、その面影を今に伝えるのは「東山泉涌律寺図」(泉涌寺蔵、紙

本著色、212.9センチ×134.3センチ)【図1】だけです。

中央に「目」の字形に回廊で繋がれた宋風建築が並び、その右上と右側にも宋風の堂があります。そして周辺に塔頭が散在していますが、その多くは、部戸をつけ、縁を回した和風建築です【図2】。そして、いくつかの堂塔は、その上に木や建物を重ねて描くことで抹消されているほか、画面右側には白絵具で塗り潰した箇所もあり、長い年月の間に修整も加えられている絵図です。

この絵図を最初に詳しく検討したのは建築史家の太田博太郎氏です(2)。同氏は中央伽藍の右手にある宋風建築を雲龍院とし、それが建造された応安5年(1372)頃を上限とする室町時代初期を本図の推定制作時期としました。雲龍院とされた建物の屋根には、かろうじてその名を記した墨書を読み取れます【図3】。同院は応永12年(1405)に焼失しますが、20年後に再建され、応仁文明の乱まで存続しました。

ところが、最近、雲龍院は、当初の画面を白絵具で塗りつぶした上に描かれているとして、本図は同院創設以前の、南北朝時代の絵図だといわれるようになりました。

しかし、画面を見直しますと、二つのことに気づきます。ひとつは、白絵具は雲龍院を避けて塗られ、雲龍院は白絵具の上に乗っていないことです。白く塗り潰されたのは左下に隣接する和風建築で、消し残された屋根の先端が雲龍院軒下にみえます。ふたつめは、雲龍院の建物は中央伽藍の宋風建築と形や色が同じというだけでなく、基壇のタイルに、目地を細く塗り残す掘り塗り

という、繊細な技法を駆使する点まで一致していることです。以上二点から、私は、雲龍院は後世の加筆ではなく、本図の景観年代および制作時期は太田氏が説いたように、室町時代初期ではないかと考えています。

中央の宋風建築と周囲の和風建築の、全く異なる描法の混在も当初からのものでしょう。ゆるぎなく描かれている宋風建築に対し、周辺の和風建築には歪みや傾きが目立ちます。

しかし、手前から見上げるような角度で捉えた伽藍の周囲を山々で包む構図、建物を回廊で結び、回廊内に樹木を左右対称に植えるプランは、1200年前後の中国の寺院の、石碑に刻まれた境内図にみられるイメージに近いものです(3)【図4】。また、本図の宋風建築は、「五山十刹図」(南宋、重要文化財、大乘寺蔵)にみる金山寺仏殿図にも似ています(4)。

この類似は、俊芿の理想が実現していたことの証しでしょうか、より直接的には、本図を描いた絵師が、宋風伽藍のイメージを、こうした絵画資料から採集、引用した結果、生じたものでしょう。境内図石碑の拓本がどれほど日本に流入していたのかは不明ですが、「五山十刹図」は、「大宋諸山図」などとともに、留学僧が持ち帰り、写本も流布したものです。そうした大陸の境内図が、日本で境内図を作成するにあたって参照されることもあったと想像します。ちなみに、同じ東山にあった三聖寺の境内絵図(東福寺蔵)にも、本図とよく似た宋風伽藍をみるができます。

それに対して、周囲の和風建築や庭の桜などには、室町時代の「お伽草紙絵」と総称される作品と共通する、素朴な味わいがあります。

中央の宋風伽藍部分が、いわば

借り物の図様であるのに対し、周辺の歪んだ和風の建物や桜のほうこそ、本図を描いた絵師の自前の表現であったといえるでしょう。(泉万里) ※図4は注3図書から引用。ほかは所蔵者の許可を得て、所蔵者および京都市文化財保護課提供。

(1) 太田博太郎「泉涌寺伽藍に就いて」『建築史』2巻3号 1940年(同氏『社寺建築の研究』[岩波書店 1986年]に再録)。西谷功「南宋・鎌倉仏教文化史論」勉誠出版 2018年。

(2) 前掲注1太田氏『建築史』掲載論文。

(3) 関平孫果清編著『中華古地図集珍』(西安地圖出版社、1995年)所収の12世紀末の「大金承安重修中岳廟図」や「靈巖寺田園界至図」。

(4) 関口欣也「中世五山伽藍の源流と展開」『新編名宝日本の美術』15五山と禅院 小学館 1991年。

付記:本図は、本年秋の特別展「聖域の美 中世寺社境内の風景」展に出品される予定です。



図4 「靈巖寺田園界至図」
描き起こし図

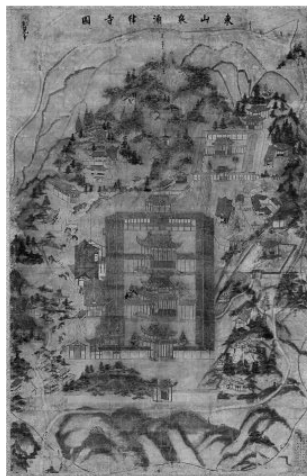


図1 東山泉涌律寺境内図 御寺泉涌寺蔵



図2 和風建築の塔頭と桜



図3 雲龍院